

# 被暗示性に関する研究

—発達を中心として—

名 倉 敬 子

## I 被暗示性の概念規定

被暗示性の概念は、多義的であり、従来、種々の学説が対立してきた。それらは、各々被暗示性の、ある面を強調していると考えられる。つまり、被暗示性の重要な側面として次にあげる四つがあり、各学説はそれらのどれかに分類されるだろう。(1)人間関係的側面、(2)認知的側面、(3)神経生理学的側面、(4)人格傾性的側面、これらのいくつか、あるいは全ての相互作用によって、被暗示性が生起されると考える。

それでは、真の被暗示性の必要条件は何かあるのだろうか。もしあるとしたら、何だろうか。

そこで、本論文では、子供は、成人より被暗示性が高い、という最も一般的に認められている事実から出発して、真の被暗示性の必要条件を設定しようとした。成人でも、何らかの条件の参加によって、被暗示性の亢進がみられる。これらの事実から、被暗示性とは、本質的には、子供の心理的特性に根ざすものであり、それは、個体の生物学的、精神的発達にともなってみられなくなるが、何らかの条件がありさえすれば成人にもひきおこされるだろう。そこで、人格構造とその機能の発達を分化度の概念でとらえ、被暗示性は、その未分化にもとづく行動様式であると考ええる。この概念を用いて言いかえるならば、子供は、人格の構造と機能が未分化であるが故に被暗示性が高く、成人は、分化しているが故に低い。そして、発達は、個人にとって、ドミナントな機能をもつために、多少の状況的条件が変化しても、従来言われているほどには、被暗示性は影響を受けないのではなからうか、このような予想にもとづいて、実験仮説を設定する。

## II 実 験

### §1, 目的と方法

子供、青年、そして成人の被暗示性の差、及び、各年齢群において、状況的条件が被暗示性に及ぼす効果の違

いを、三つの型の被暗示性テストを用いて検討することを目的とする。

〈被暗示性テスト〉 観念運動型の被暗示性テストとして、腕下降テストとふりこテストを、indirection-kindのテストとして、線分漸増テストを、同調型のテストとして、インクプロットテストを採用する。いずれも、被暗示性テストとして、従来からよく用いられてきたものである。

〈状況的条件〉 直接暗示にとって有効だとされている。テストへの動機づけ(T—M)及び、実験場面の緊張や不安に影響すると思われる、教示者の条件(I)を操作する。つまり、T—Mとして、積極的動機づけ(P—T—M)及び、統制的動機づけ(C—T—M)を、教示によって操作する。I—条件としては、緊張的教示者条件(K—I)及び、弛緩的教示者条件(R—I)を、教示者が、面識のない成人であるか、それとも、仲間であるかによって、操作する。T—MとIの条件を組合せて、次の三つの状況的条件群を設定した。

高条件群(H)……(P—T—M) × (K—I)  
中間的条件群(N)……(C—T—M) × (K—I)  
低条件群(L)……(C—T—M) × (R—I)

線分漸増テストについては、刺戟条件を操作することによって、次の三つのテストとする。

線分漸増テスト…A—S条件…(短時間刺戟呈示)  
線分漸増テスト…B—S条件…(長時間刺戟呈示)  
線分漸増テスト…C—S条件…(短時間刺戟呈示  
+刺戟が不明瞭+言語暗示つき)

〈被験者〉 子供の被験者として小学四年生くらい、青年として、高校生を、成人として大学生を採用する。

以上の、三つの年齢群、三つの状況条件群、三つの刺戟条件について、前述の被暗示性について、前述の被暗示性に関する考察にもとづいて、次の三つの実験仮説をたてた。

1 被暗示性は、いずれの条件群においても、大学生、高校生、小学生の順序で高くなる。

## 被 暗 示 性 に 関 す る 研 究

2(a)大学生と小学生では、いずれの条件群においても、各々の被暗示性は変化がない。

(b)高校生では、高条件群、中間的条件群、低条件群の順序で、被暗示性は低下する。

3(a)線分漸増テストC—S条件では、大学生と高校生の被暗示性は上昇を示す。

(b)小学生では、A—S, B—S, C—S, いずれの条件においても被暗示性は変らない。

### §2. 手 続 き

被験者…小学生 45名, 高校生 49名, 大学生 35名を、三つの状況的条件群に、各々ランダムに割りあてる。

被暗示性テスト6つを、次に述べていく順序で、個人的に実施する。

I ○線分漸増テスト・A—S条件…10枚の線分の描かれているカードを、各々2秒間呈示する。最初から5枚目までは、線分は漸増していくが、あと5枚は5番目と同じ長さである。同じ長さの線分についても、漸増していくように目測した場合、被暗示性得点がスコアされる。

○線分漸増テスト・B—S条件…A—S条件と同じ手続き。但し、カードは、被験者が線分の長さを書き入れてしまうまで呈示される。

○線分漸増テスト・C—S条件…線分の漸増分がわずかであり、しかもA—Sと同じく2秒間呈示。  
“線分はだんだん長くなっていきます”という言語暗示が与えられる。

II インクプロットテスト…ロールシャッハ図版3枚について、各々三つづつ、ほとんどありえない反応について、みえるかどうかたずねられる。みえるとして、みえる部分を示したら、被暗示性得点とされる。

III ふりこテスト…糸の先におもりをつけたふりこを指先でぶらさげて、それが、思っただけで自然にゆれ出す、という言語暗示が与えられる。ゆれた量が被暗示性得点とされる。

IV 腕下降テスト…腕かだんだんさがってくる、という言語暗示が、テープによって与えられる。腕がさがった量を被暗示性得点とする。

状況的条件のテストへの動機づけは、各々のテストについて、テストの前に、次のような教示が与えられる。

○積極的動機づけ… I 線分漸増テスト, “線分の長さを目測する力のテストです”

II インクプロットテスト, “ものを注意深くみる力のテストです”

III ふりこテスト, IV 腕下降テスト… “集中力のテストをします”

○統制的動機づけ… “ゲームのようなものですから、できたほうがよいとか、悪いとかいうことはなく、個人差を知るだけです”

教示者の条件の、弛緩的条件では、各々の実験群の中から、適当に教示者を選び、その人に、実験にあたらせる。

### §3. 結 果

<年令> 線分漸増テストC—S条件とインクプロットテストをのぞいた、他の四つのテストでは、大学生と小学生の間は、いずれも、1%の危険率で有意差があった。また、高校生の得点は、大学生と小学生との間にあり、大学生、小学生各々との間に、有意差があったりなかったりである。それを表1に示す。各テストごとに、三つの状況的条件群についてみても、四つのテストに関するかぎり、いずれの条件群においても、同じことがいえる。

<状況的条件> 各テストについて、条件群の平均差の検定を表2に示す。線分漸増テスト・A—S条件のL群とH群の間及びインクプロットテストのN群とH群の間に有意差がみられたにすぎない。

線分漸増テストの刺戟条件差を、各年令群について検定したのが表3である。大学生と高校生では、C—S条件と他の条件との間に有意差があったが、小学生では、差がなかった。

表1 各テストにおける年令群の被暗示性平均差のt検定

	線 分 漸 増 テ ス ト			インクプロット テ ス ト	ふりこテスト	腕下降テスト						
	A—S条件	B—S条件	C—S条件									
	差	検定	差	検定	差	検定	差	検定				
小学生—大学生	1.4	**	1.3	**	0.2		0.8		2.6	**	5.5	**
高校生—大学生	0.1		0.7	**	0.3		0		1.2	*	1.8	
小学生—高校生	0.3	**	0.6		-0.2		0.8		1.4	**	3.7	*

表2 各テストにおける条件群の被暗示性得点平均差のt検定

	線分漸増テスト			インクプロット テスト	ふりこテスト	腕下降テスト
	A-S条件	B-S条件	C-S条件			
	差 検定	差 検定	差 検定	差 検定	差 検定	差 検定
H群-L群	0.7 *	-0.1	0.4	0.5	1.1	-2.5
N群-L群	0.4	-0.1	0.3	-0.9	0	-1.0
H群-N群	0.3	0	0.1	1.4 **	1.1	-1.5

表3 線分漸増テストの刺激条件における被暗示性得点平均差のt検定

	大学生	高校生	小学生
	差 検定	差 検定	差 検定
A条件-B条件	0.3	0.2	0.4
A条件-C条件	1.6 **	1.9 **	0.4
B条件-C条件	1.9 **	1.6 **	0.4

{ \* 5%  
\*\* 1%

§4. 考 察

以上の結果から、実験仮説を検討してみる。仮1…線分漸増テスト・C-S条件及びインクプロットテストをのぞいた、四つのテストについては、大学生は、いずれの条件においても、常に小学生よりも低い被暗示性を示し、高校生は、その中間にあるといえる。

仮2、条件差がみられたところもわずかにあったが、方向は一定していない。これらの条件は、被暗示性を変化させないといつてよいだろう。(b)については、高校生も、大学生や小学生と同じ傾向を示したため、全く実証されなかった。

仮3、仮説はそのまま実証されたといえる。

仮2(b)については、追実験によって、さらに検討されたが、同様の結果が得られた。

故に、仮2(b)は、(a)に組入れられる。またインクプロットテストは、被暗示性テストとして適当でないと考える。以上の修正を加えて、真の被暗示性は、人格構造と機能における未分化さを条件とする行動様式であり、従って、それは、年令的発達の数となる、という基本的考えにもとづいて設定した三つの実験仮説は実証されたと考えてよいだろう。